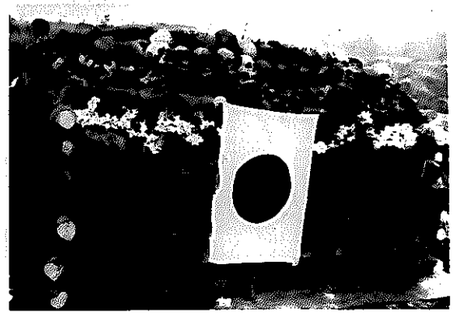
こんにちわ

ソロモンの遺骨収集団に参加して

坪川桐太郎さん（庄瀬第五・63歳）

戦友会報「あやめ」を手に語る坪川さん

現地の人の案内で遺骨収集


血染めの丘で遺骨を並べて慰霊祭を

坪川さんは、昨年暮れ、第二次世界大戦の激戦地「ソロモン諸島」へ、新潟県からただ一人、政府派遣の遺骨収集団の一員として参加。「無残なお骨を土の中から取り出すたびに、涙が頬を伝わって」と、現地での模様を、ふり返ってくれました。

ガダルカナル島は紺碧の海と空にポッカリと浮かんだ夢の島で、かつて戦場だった北海岸は、はるか日本の方から吹いてくる潮風が何とも言えない快さで、四十年過ぎた今は平和な楽園です。公園などには、米、英国の国旗に日の丸の旗も混じって、今回の収骨にも大変協力をしてもらいました。

新潟県と同じくらいの、この小さな島で日米両軍が国運を賭けて戦った。私も四か月の戦闘に参加したわけで、この間に日本軍約二万人、米軍約五千人もの犠牲者が。白根市だけでも七、八十人くらいの人がいられたのではと推察しています。

収骨は、当時の記憶を模索しながら、また、現地の人たちの情報をもとに捜すわけですが、昼なお暗いジャングル。日中は四十度近い暑さ――なかなか思うにまかせません。米軍の鉄条網などが張り巡らされた付近には必ず遺骨が見つかりました。四十年もたつと、もう土に還る直前といった感じでした。その周辺からは鉄製の遺品しか出てきませんでした。

最後の日に、血染めの丘と呼ばれる慰霊碑の建てられた丘で、収骨した三百五十九柱の遺骨を並べて慰霊祭をしました。このお骨は五月に千鳥ケ渕墓苑に納骨されました。

終戦後、日本はめざましく成長しました。平和はいかに素晴らしいことであるか、私達はしみじみ感じさせられます。しかし、今日の発展のかげには、悼ましい戦争の悲話があり、大勢の犠牲者があったことを忘れてはいけないと思います。万物の霊長たる人間が、なぜこのような馬鹿げた殺し合いをするのか、世界人類が真剣に考えていかなければなりません――と、語ってくれました。

一千本の桜並木

語る人
古川庄三郎さん（七九）
鷲ノ木桜町

私の思い出 昔のわが街

戦前は、一千本の桜並木が天野から続きそりゃもう見事でした。花見客も川船に乗って新潟などから大勢訪れ、花に酔い、きれいどころに酔い、にぎやかなものでした。家内も、若いころ川船に乗って白根から花見に来たそうです。

戦争が始まり、この桜の木も伐採され、たき木として供出。現在の桜は、終戦後に大鷲観光協会が、六百本くらい植えた一部です。当時は、一本五百円くらいだったそうです。

こんなことから、町村合併の際も、この地をめぐっていろいろな話題もありました。

今は、はでなにぎやかさはありませんが、家族連れが桜の下でバーベキューを焼いたりして、五月の一日をのんびりと過ごしています。

大通川堤の桜

自根人物伝

★須藤時俊（すどうときとし）

白根市白根の町長。天和十一年（一八四〇年）二月一日、外城村で生まれる。幼名俊一、瑞陰と号した。

明治十年十月、中之口川に四十間の橋をかけ、同十九年八月、低湿地を埋め立て新市街を開き、同四十三年八月に小須戸線の不便をなくするため、国道を市街地に貫通した。低湿地に排水機を設けるなどこの地方のために尽くした。

県会議員として三十年、よく責任を果たした。詩文を作り、書画、骨董の鑑識にすぐれていた。明治四十五年四月十九日に七十三歳で亡くなった。（中蒲原郡誌から要約）

西永寺（五六の町）にある須藤時俊の碑

「私の思い出 昔のわが街」欄へあなたの思い出の場所を。連絡は企画財政課広報広聴係へ。